
病弱な彼女と強気のカレ

桜の園

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

病弱な彼女と強気のカレ

【Nコード】

N6570W

【作者名】

桜の園

【あらすじ】

不思議な病気持ちの主人公

星月 星花

そして強気の彼

斎藤 隼人

二人の恋はみのるのか?!

（前書き）

気まぐれ投稿です
即興で作りました

春 それはサクラが咲く季節

そして、恋をする季節でもある

「先輩あの・・・そのす・・・好きです!!付き合ってください」

「ごめん無理!でも君がニキビと体重を直せば考えてあげる」

「本当ですか?!頑張ります!!」

「うん・・・じゃあ」

「はい、ありがとうございます」

馬鹿な女・・・どうしてこんな嘘を本気にするのか

特にさっきの奴、何度も何度も・・・しつこい

「しー言わないで！！頑張って体を良くしたのに！！」
「はいはい・・・すみませんでした」
「わかればよろしい！！」
？ドン
「イタッ！！」
「おい！大丈夫か？！おいテメエ・・・あやまれや」
「ああ？んだテメエ・・・やんのか？」
「おい隼人この子可愛くね？」
「たしかに君名前は？」
「えっ・・・私ですか？星月 星花ですけど？」
「星月？・・・ああー！！！！中学の頃の！！」
「え？失礼ですがお名前は・・・」
「斉藤 隼人だよ？」
「せ・・・先輩」
「そう・・・ねえあの時の約束覚えてる？」
「約束？」
「うん、中学の頃の体系を変えれば付き合っつて」
「ああーはい」
「でさあ俺と付き合いおつよ」
「はい・・・えっ！！」
「じゃあ決定ね」
「あの・・・」
「勝手に決めんじゃあねえ！！！」
「レンジ！駄目だよ」
「でも」
「レンジ？電子レンジ？！www」
「先輩も・・・」
「じゃあ今週の土曜日デートしよう！！」
「はい・・・あの先輩のメアド教えてくれませんか？！」
「えっ・・・いいけど？」

ぴろろり〜ん」

「おりがとうございます！！それじゃあ」

「いいな〜隼人うらやましい」

「はっ！！馬鹿言つなよアイツちょーウザイから」

「まじかよちよつとガツカリかも」

「まあ・・・いこうぜ」

――――

――――

――

↓

土曜日

「まだかなー先輩・・・待ち合わせの時間から1時間も過ぎてる」

その後午前10時から待ち合わせしているのに全然こなかった

喫茶店

「でよーwww」

「マジ?!クソ〜行きたかった」

「・・・あの声斉藤?!何でココに・・・星花とデートじゃあ・・・

録音と写真を撮って」

ぽつぽつ・・・。

「雨・・・でも待たなきゃ」

「やべー大雨じゃん傘持って来ていない」

「走ろうぜ」

「?・・・アイツ」

「え?何?あの子・・・星月ちゃん」

「マジかよ・・・ありえねー」

「星花!!」

「レン・・・ジ」

「馬鹿!! 医者に言われただろうが!! なるべく雨に濡れるなって」

「ご・・・めんでもせ・・・んぱいを・・・」

「しゃべんな!!」

「おい!! アンタどういうことだよ?」

「こいつ余命1ヶ月なんだよ」

「えっ・・・」

「斉藤がいればこんなことにはならなかったんだ!!!!!!」

「・・・ごめん」

「ここにいたのね!! ほら星花ちゃん病院へもどるわよ」

「小沢さんという・・・」

「原因が分かったの!!」

「ええーーーー」

「それより早く行かないと」

「よっ!! またせたな」

「神崎!!」

「救急車へ」

病院

「意識不明状態です」

「そうですか・・・ありがとうございます」

「おいアイツと俺の二人きりにしてくれないか?」

「分かった、時間をやる」

「ありがとう」

705室

「ごめん...星月」

「.....せ...先輩?」

「星月?!」

「わ...私の寿命あと何日ですか?」

「.....2日」

「そーですか…あの最後にお問い合わせが…」

「俺に出来ることなら」

「この…2日間私を…看病してくれませんか？」

「そんなことでいいのか？」

「はい…短い間でも好きな人と一緒に…居たいから」

「…本当に馬鹿だな…星月は」

「そうですか？」

「ああ…いいぜ看病してやるよ」

「本当ですか？ありがとうございます」

「じゃあ俺からも看病の間は星花って呼んでいいか？」

「はい」

それから看病は始まった

「おゝい来たぞー！」

「先輩…」

「熱でもあるのか?!」

「へっ？」

「ぺた…」。

「!!…な…何を」

「熱はないなー星花悪い物食べたか？」

「ち…違います」

「じゃあドキドキしてる？」

「はい…無駄に意識しちゃって」

「可愛い…」

「えっ！」

「何でもない忘れる」

「じゃあ忘れません！」

「なっ…」

「冗談です♪」

「よかった」

つい時間を忘れて話していたらもう夜になっていた

「じゃあ帰るから」

「はい……」

「……。目、閉じて」

「えっ？はい」

「俺がいいって言うまで目閉じていて」

……………。

「ん……？！」

「いいよ……」

「今何を……？」

「キ……キス」

「幸せです……とても」

「もう悲しい顔しなうで？」

「はい……」

「イチヤイチヤするのは構わないけど消灯時間とっくに過ぎてるんだけど」

「すいません……！！」

明日朝早く行かないと

いつ何時に死ぬかわからない

なるべく長く居たい

そう思った

「星花……！！」

「……………。」

「嘘だろ？」

「よっ！斎藤……星花はもうこの世には居ねえ」

「……星花の両親に会いたいんだが」

「変わったなアンタ」

「別に……いいじゃん」

「ちよっとまってる」

「あなたが斎藤君？」

「なぜ僕の名前を？」

「星花が毎日斎藤君の話ばかりして…とても好きなんだな」って
思って…私も会ってみたかったの」

「そうですか…」

「あの子の顔とても幸せな顔だったわ」

「見て来ていいですか？」

「ええ…私はこれで」

霊安室

「関係ですか？」

「はい」

「ではこちらへ」

「……星花俺気づいたんだ…星花が好きだった、今までしたことす
ごく後悔してる…ごめん」

……ポロ

「ありがとう星花」

十年後

「ただいま」

もう十年になる

「ん？手紙？」

星花からの手紙からだった…。

（後書き）

原因は雨です
すいませんでした

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6570w/>

病弱な彼女と強気のカレ

2011年9月14日03時33分発行